

第14回国際社会福祉教育会議のハイライト

若 林 龍 夫

国際社会福祉教育会議 (International Congress of Schools of Social Work 略称 ICSSW) は、2年毎に国際社会福祉会議 (International Conference of Social Welfare 略称 ICSW) と同時期に、これに先だって開催される、社会福祉従事者の教育に関する国際的研究会議である。ICSSW と ICSW の開かれるころは、国際ソーシャルワーカー協会 (International Federation of Social Workers) の総会もあり、また開催国の組織委員会が計画するオリエンテーション・セミナーもあって、あたかも社会福祉に関する国際的祭典のような景観がある。いうまでもなく、ICSW が最も大きな集会で、参加者も2,000人～3,000人で、わが国からも出席者のために団体旅行が計画される。ICSSW はこれとは対照的にこじんまりとした研究会で、出席者も100人～200人ぐらい、主として社会事業学校の教員学生および社会事業従事者の養成に関心を持つ人びとにおのずから限られている。わが国でいえば、ある意味で社会福祉学会やソーシャルワーカー協会の研究会に当るものであるが、ソーシャルワーク教育の国際的レベルでの研究会議であることは間違いない。

ICSSW は国際社会事業学校連盟の主催するところであるから、つぎにこの連盟について説明しておきたい。

国際社会事業学校連盟 (International Association of Schools of Social Work) は、各国社会事業学校と国内社会事業学校連盟とが、国際的レベルにおいて協力して、全世界の各地域における社会福祉教育の健全な計画を促進発達させようとする団体である。国連、ユニセフ、ユネスコおよび米州機構の諮問機関の地位にあり、国際社会福祉協議会 (ICSW の主催者) および国際ソーシャルワーカー協会と密接に連携を保ちつつ活動している。

1929年主として西ヨーロッパ諸国に存在した社会事業学校をメンバー校として成立し、初めは小さな団体であったが、その後着実に、その数と影響力を増大して、いまや世界のあらゆる地域にある社会事業学校のスポークスマンとなるまでに成長した。現在世界50カ国にわたり、19の国内社会事業学校連盟、400の社会事業学校

を包含している。

なお日本社会事業学校連盟は1955年(昭和30年)結成されたが、翌年8月西独ミュンヘンで開かれた第8回国際社会事業学校連盟総会において、加盟を承認せられた。1970年現在、加盟校数は、大学院6、大学21、短期大学6、あわせて33校を数えている。

ここにその議事録を訳出した第14回国際社会福祉教育会議は、1968年8月14日～17日、フィンランド、オタニエミ (Otaniemi, Finland) の、見るからに涼しい白木造りのディポリ (Dipoli) 大会議場で開かれた。国際社会事業学校連盟が、フィンランドの社会事業学校の協力を得て開催したもので、これに引続いてただちに、ICSW が同じ場所で開かれている。両会議とも、ICSW のフィンランド国内委員会によって設けられた特別組織委員会によって準備せられたことは、日本で開催された第9回東京会議 (1958年) と同じである。また教育会議のプログラムが、国際社会事業学校連盟が委嘱した国際プログラム委員会によって作成せられたことも、東京会議の場合と同じであった。

さてヘルシンキ会議の主題は、“社会的価値とソーシャルワーク教育” (social values and social work education) であった。全体会議および分科会において、これらの問題を掘下げ、社会的価値とその普遍性のよりよい理解に達し、すべての社会的価値の中から、ソーシャルワークが促進しようとする価値を選択する規準を明らかにする。さらにソーシャルワーク価値の教授の可能性と適用の問題を話し合おうとするのが、その野心的なねらいであった。

8月13日(火)は登録にあてられ、14日(水)夕の開会式から会議は始まった。まずわが国でも有名な、ストックホルム国際経済研究所教授、グンナー・ミュルダール (Prof. Gunnar Myrdal, Institute for International Economic Studies, Stockholm, Sweden) が“社会的価値とその普遍性” (social values and their universality) と題する講演を行った。

8月15日(木)午前は、ザンビア大学、オッペンハイマー社会事業学科主任、マイケル・ハフ教授(Prof. Michael A. Hough, Head, Oppenheimer Department of Social Work, University of Zambia, Lusaka, Zambia)による、“ソーシャルワーク価値—価値選択の基準”(social work values—criteria for choice among values)と題する講演があった。つづいて午後2回にわたり、分科会が開かれた。

8月16日(金)午前はパネルと分科会にあてられ、午後は施設見学であった。パネルのテーマは“ソーシャルワーク価値の教授の可能性と適用”(the teachability and application of social work values)で、パネリストは、フィンランドのミス・メルビ・アーラ(Miss Mervi Ahla, Lecturer, University of Helsinki, Finland), ブラジルのミス・マリア・アマリア・アロゾ(Srta Maria Amalia Arozo, President, Brazilian Association of Schools of Social Work, Rio de Janeiro, Brazil), インドのゴリー(Dr. M. S. Gore, Director, Tata Institute of Social Sciences, Bombay, India), ウガンダのミス・ヴィオレーヌ・ジュノド(Miss Violaine Junod, Head, Social Work and Social Administration Unit, Makerere University College, Kampala, Uganda), フランスのミス・J・フィルビー(Mlle J. Philbee, Directrice, Ecole de Service Social de la Région Nord, Lille, France)およびイスラエルのローゼンフェルド博士(Dr. Jona M. Rosenfeld, Prof. Paul Baerwald School of Social Work, Jerusalem, Israel)の6人が選ばれ多彩をきわめていた。

8月17日(土)は、午前、国際社会事業学校連盟の総会が行われ、午後、再考察と総括の全体会議と閉会式があって、教育会議は終わった。

なお総会においては、1954年以来、会長の職にあり、また社会福祉教育界、内外の敬愛を一身に集めておられた、英国のデーム・アイリーン・ヤングハズバンド(Dame Eileen Yonngusband)が、高齢の故をもって、惜しまれつつ勇退されたこと、代って、アメリカ、コロンビア大学、社会事業学部長ハーマン、シュタイン博士(Dr. Herman Stein, Provost, School of Social Work, Columbia University)が満場一致をもって会長に就任せられたことを誌しておかねばならない。

上記のプログラムによっても明らかなように、本教育会議の参加者たちは、まず冒頭に行われた二つの講演(印刷して配布)を聞き、一方、各国の国内連盟が、プ

ログラム委員会の設問に答えて提出した、レポートのサマリー(国別に要約、印刷配布された)を読み、これらを踏まえて各分科に分れて討議し、これを全体会議に持寄って再考察と総括をするという方法がとられた。

これをまとめて採録したのが、“第14回国際社会福祉会議のハイライト”(highlights of the XIVth international congress of schools of social work)であるが、二部にわかれており、第一部は、ノルウェー、トロントハイム社会事業学校長リリアン・バイ女史(Lilian Bye, Director, School of Social Work, Trontheim, Norway)の執筆にかかり、第二部はベルギー、ゲント大学教授兼ゲント市立高級社会科研究所長、ゲルダ・デ・ボッイ女史(Professor, University of Ghent, and Director, Higher Institute of Social Studies of the City of Ghent)がまとめられたものである。

第一部においては、1950年代の前半から60年代の前半に至る間に、専門ソーシャルワークとその教育が、個人に焦点をおく見方から、まったく反対の極である、社会と組織に重点をおく見方に移って行く動向が明らかにされ、さらに60年代後半に入ると、福祉国家の実状に照らして、再転回して個人に焦点をあわせる見方、ケースワークに帰るようになる経過が追真的に述べられている。

他方、第二部においては、ヘルシンキ会議の討論のあとを克明に追い、そこに現れる専門ソーシャルワークの問題とその解決の方向が示唆されている。すなわち、孤立化する専門ソーシャルワークと広義の社会福祉分野との関係、福祉国家の法制的経済的構造の問題、社会変動のエージェントとしてのソーシャルワーカーの役割と責任、ソーシャルワーク価値を教えることの可能性と学生参加の問題、価値の相互補足性と均衡の概念等、当面する諸問題とこれに対応する専門ソーシャルワークの解決の方途が明らかにされているのである。

第一部、第二部ともにそれぞれ特色があり、全体としての教育会議を見事に再現していると思う。それは1968年の時点において、専門ソーシャルワークが到達した最高地点を示すものといつてよいであろう。

翻訳には若林竜夫が藤本昇、前田敏雄の両君の助力を受けつつ、これに当った。できるだけ達意と正確を期したけれども、思わぬ誤りをおかしているかもしれない。大方のご叱正を仰ぐことができれば幸いである。

また社会保障研究所の三浦文夫研究部長と所員の方がたの慇懃と激励がなかったら、到底この訳業は完成しなかった。誌して厚く感謝の意を表する。

第 一 部

ノールウェー・トロントハイム
社会事業学校長
リリアン・パイ 著
若林竜夫 訳

われわれはソーシャルワークの教育者として、また臨床家として、過去しばらくのあいだ、われわれの陣営の側に、「何かが間違っている」という事実が気がついていた。「ソーシャルワーク」の概念の正確な意味、範囲、目的を定義することは、いよいよ難しくなってきた。ほかの学問分野の専門家たちからは、もし、われわれが提供するサービスタイプを再評価しないなら、われわれはまもなく専門家として“立って行けなくなる”だろうといわれていた。“求められている当のもの”をわれわれは与えていないのだからである。

1966年ワシントン国際社会福祉教育会議の際であるが、ほかならぬデーム、アイリーン・ヤングハズバンド(Dame, Eileen Younghusband)が、もしわれわれが自分たちの見解の二、三を変え、範囲を拡げないならば、われわれは遠からず、専門職であることを止めるか、あるいはわれわれの専門は、現代の課題にこたええないので、周辺的なものになってしまうであろうと言った。私は教育者であるから、このことに深い関心を持った。同じ会議の分科会の一つで、“ケースワークは死んだのか”と問われたときも、私の関心は減りはしなかった。あるヨーロッパの社会事業学校長は、率直にわれわれが今なお方法としてのケースワークについて語る必要があると感ずるならば、われわれは“石器時代”にもどることになると言ったものである。

何が起ったのであろうか。

1950年代に帰ってみると、精神医学ソーシャルワークは、なおこの分野における中心的方法であり、“最高のもの”とみなされていた。大部分フロイト学派の精神医学理論に基づいた治療アプローチは、アメリカ合衆国において全盛であった。そしてアメリカから他の国々に広がっていった。しかしアメリカ以外の国においては、その国の文化的特異体質と特殊事情と地方的既成メカニズムに出会ったのである。そのため全体的な見方とソーシャルサービスの評価の上に、ひとつの変化が起ったのであるが、それは一方の極から全く反対の極に走るものであった。すなわち、もっぱら個人に焦点をおいた見方から極端に組織に焦点をおいた見方に移ったのである。それでもわれわれはなお不十分であると感じており、われ

われは爆発的な社会変動の時代に、全世界が対決を求められている問題にこたえていないと告発されるのである。

このことは、とくにソーシャルワーク分野の種々多様な教育施設に不安をもたらしている。われわれがもし専門職として、これらのニードが何なのかを明らかにしないならば、われわれは“新しいニード”に応ずるための有能な専門家を教育することもできなければ、一般に人的資源を準備することもできないのである。けれどもわれわれが実際にこれらのニードを明らかにし得るためには、これらのニードが根ざしている価値を検討しなくてはならない。いく百万のんびとが豊かな生活をしているのに、いく百万のんびとが飢えている。富める国と貧しい国とのあいだに、持てる者と持たざる者とのあいだに、黒人、黄人、白人のあいだに、世界的緊張がある。人口爆発が貧困と進歩に関する問題を悪化させている。大衆は種々な社会的混乱からの亡命者として、崩壊のただ中に生きており、援助者としてのわれわれは圧倒されているのを感じ、防衛的になっているのである。

個人に焦点をおいた見方に、はじめて強力な打撃を与えたのは、レスター・グレンジャー (Lester Granger)であった。1952年インドにおいて開催された国際社会事業会議のあとで彼は、アメリカのソーシャルワーカーの団体に、次のように尋ねたものである。「もしみなさんひとりびとりが、いわゆる“優良”民間福祉機関とちがって、35人ではなく、3,500人のクライアントを担当するとしたら、みなさんは一体どうしますか。」このことは主として精神分析の長期にわたる治療概念に基づいたサイキアトリック・ソーシャルワークの全盛期におけるできごとであった。世界的見通しに立てば、何かがうまくいっていないことは、あまりにも明らかになったのである。われわれは個人はその社会的環境の産物であると同様に、社会的可能性の創造者であることを考えにいれていなかった。それゆえ、最近の精神医学理論による個人の治療だけでは、十分ではなかったのである、またこの観点からするケースワーク批判は、正しかったのである。しかし1966年ワシントン会議で、“ケースワークは死んだのか？”あるいは“死んでいないとしたら、死ぬにきまっているだろうか？”と問うたのは、正しかったであろうか。

レスター・グレンジャーが初めて彼の挑発的な問いを發してからこんにちまでのあいだに、ソーシャルワークの分野では、大きな変化が起っている。以前よりいっそう多くの男子が学校に、またこの専門職に惹きつけられ、多くの大学がソーシャルワーク博士の学位を授与するよ

うになった。現業の高い地位が福祉行政官、社会計画樹立者、理論的調査マンのために開かれた。そして気がついてみると、大多数の専門家が女性で、最高レベルの人も修士であった初期に比べると、これらの博士候補者の93パーセントが男子である。初期の頃には、女性の専門家が書物を書き、ニーズを明確にし、方法を規定したのである。

こんにち、それは全く異なり、男子が書物を書き、現状を批判し、分析し、調査用質問項目を作るのである。ハーバート・アプテカー博士(Dr. Herbert Apteker)は、このことを次のように述べている。

“社会科学は、いま、全ソーシャルワーク文献の中で優位を占めている。あらゆるタイプの会議が社会問題、目標および任務に関するペーパーに優先順位を与えている。そして若干の社会事業学校では、理論、とくに社会組織論が、以前のパースナリティと行動の強調にとって代っている”と。

振子が一周したのである。女性が優位を占めていた一面的排他的な精神分析の治療アプローチから、ひとまわりして、男子が優勢で、同じように一面的な社会学的組織的アプローチがこれに代ったのである。

カナダ社会事業学校連盟の報告書は、カナダ社会事業学校学生の価値観を反映して、次のように述べている。

「学生たちは、社会問題は、ほんらい、社会から発生したものだという意見である。このことは個人の病理と精神医学の教説に関連した学校の講義を時代遅れのものにしている。いま彼らにとって大切なのは、貧しい大衆、少数民族集団、それに新しい形のコミュニティ・サービスである。」

こういう問題は、すべて、組織理論と政府の干渉ないし政治的“革命的”方法によるソーシャルアクションに関連しており、臨床的アプローチはその影に隠れてしまった。こうした印象は、アンナ・フロイドのニューヨーク精神分析学会への声明書によってさらに強められた。

“精神分析学は、それが最も役に立つはずの人びとのあいだで、すなわち自己と人生について最も混乱している若い世代の人びとのあいだで、はなはだしく衰退したように思われる。こんにちの青年は、人間の自分自身に対する戦いに興味を失い、人間の社会に対する戦いに関心を示している。社会への適応は彼らの考える最後のものである”。

これらの言葉は、生れながらも、またその専門によっても、精神分析運動そのものであった人から発せられたもので、不吉な意味をになう言葉である。では、われ

われは、ケースワークは死んだと結論しなければならないのであろうか。ソーシャルサービス問題に対する臨床的アプローチは実際無用なのであろうか。もしそうであるなら、人間のニーズが、カテゴリーに分類定義され、大衆問題に関係する統計学的方法とデータマシンによって処理される、もっぱら社会学的アプローチの方がよいのであろうか。われわれはこのことに対して、何か証拠を持っているのだろうか。

私はそうは思わない。一面的な社会学的アプローチを強調した国々が、その成功した証拠を与えないのである。このことは、またのちに触れることにしよう。

方法に関する、われわれの分野における明らかな混乱の現れと、明確なソーシャルワーク原理が欠けているために、国際社会事業学校連盟は、第14回国際社会福祉教育会議の準備として、そのメンバー校に、それぞれの国における、ソーシャルワークに関する価値観を報告することを求めた。そして比較分析の基礎となるように、四つの重要な問を設けたのである。

1. ソーシャルワークが増進すると思われる価値は何であるか。
2. 学生がもっとも関心を持つ価値問題は、何であるか。
3. 貴国においては、どんな要因とどの集団が、これらの価値を支持し、または反対すると思うか。
4. 貴国において次の二つの場合、どんな価値間の葛藤が起ったか。
 - a. 若干の最近の政策決定に当って、
 - b. 特殊なケース状況において、

いうまでもなく、ここでは“価値”という言葉が4つの質問を貫く主要概念である。したがって、アメリカの報告書“アメリカ合衆国におけるソーシャルワーク価値の次元”が“価値”概念の科学的分析から始めていることは、なんの不思議もない。“価値”という言葉によって、われわれは何を意味するのであろうか。これに関連してアプテカー博士は、1966年ハワイ大学東西文化センターで開かれた、ソーシャルワーク教育協議会(Council on Social Work Education)主催の異種文化相互関係セミナーの議事録から、次の一節を引用している。

“価値については、少なくとも3日間話し合っても、完全な定義に達することはなかったであろう。現にこのセミナーで起ったことは、討論の水準が混乱してきたことである。われわれは価値について論じていたのであるが、それが人類学的見地からであるか、社会学的見地からであるか、社会福祉あるいはソーシャルワ

ークの立場からであるか、心理学的なそれからであるか、倫理的な立場からか、あるいは哲学的な立場からか、その点が分らなくなったのである”。

こういうわけでわれわれの陣営において、とくに国際的水準において、混乱が起っていることは、驚くに当らない。もう一度アプテカー博士の声明書を考えてみると、“価値”という言葉には、少なくとも7つの異なるアプローチがある。しかし、われわれがこれまで委員会や会議や大会において協議し、討議したとき、われわれはアプローチはただひとつ、われわれ自身の特殊なアプローチしかないと思いこんでいた。そしてわれわれの同僚や仲間のワーカーたちが非常に違った根拠から、すなわち、彼らの自己中心的な文化価値根拠から話していたという事実には、十分注意を払っていなかったのである。

1957年10月人間的価値の新知識に関する科学会議(The First Scientific Conference on New Knowledge in Human Values)がボストンのマサチューセッツ工科大学の創造的愛他主義研究会(The Research Society for Creative Altruism)主催で開かれた。そして15名のそれぞれの学問分野におけるすぐれた学者と指導者(そのうち1名は女性)が次のような質問に答えて、ペーパーを提出した。われわれは人間的価値について何を知ることができるか。諸君の研究分野において、理論的、実験的、経験的に、どんな新しい発展が人間的価値の将来にとって重要であるか。人間的価値の科学は可能であるか。

当時の学者たちにとって、“価値”概念の共通分母を見出すことは、アプテカー博士の出席したセミナーと同じように困難であったこと、またアプローチの方法についてはそれ以上のものであったことは、いうまでもないだろう。経済学者ウォルター・A・ワイスコプフ(Walter Weiskopf)は、ボストン会議で発表されたペーパーについての彼のコメントの中でつぎのように指摘している。「現代思想における価値に対しては、三つのアプローチの仕方がある。それらは自然主義者、人道主義者および存在論的アプローチと呼び得る三つの異なる人間思想のモデルに基づいている」と。彼はモデルが異なること、種々なペーパーがこのことを明らかにしたこと、およびそれらは共通の場を持たないことをはっきりとさせている。

ヨーロッパ協議会閣僚委員会の一報告書は、1967年6月、ソーシャルワークの基本的目的は、すべての国にとって同一であるけれども、“その実現のための具体的手段は、異なる国々の経済的社会的パターンによって違う”ことを指摘した。

K・ムクンダラオはインドに関する論文の中で、アメリカ人の著者、ジャック・F・ウェラー(Jack F. Weller)に言及している。ウェラーはアパラチャ山脈の山の中で、牧師として、また社会福祉ワーカーとして働いた人であるが、彼はこの山間部では、同一の言葉(米国語)が話されているけれども、彼のいうことが人びとに通じないことを知ったのである。ウェラーはそのことから次のことを問うている。

1. なぜ彼(アパラチャ山脈の住民)は、はわれわれと同じではないのか。
2. なぜ彼は、われわれが反応するように、反応せず、われわれが生活するように生活しないのか。
3. 彼の目的と希望は何であるか。
4. 都会に移住した場合、何故、彼は山間の生活様式に執着するのか。
5. なぜこれらの人びとは、あのような生活をしながら、提供された援助も欲しがらないように思われるほど、満足しているのだろうか。

ムクンダラオはこれらの間に心を動かされた。それは全くインドの状況に適用できたからである。インド人は副文化パターンをあらわす他のインド人を理解しない。農民は都会の人びとを理解しない。工業労働者には、農村出の繊維労働者が、収穫期になると、高賃金の工場の仕事をやめて郷里に帰り、家族を助けて土地を耕す気持ちが分らない。なぜそうするのだろうか。彼は金を損するのである。そのわけは、工業労働者は一連の別種の価値、すなわち“新”価値を奉ずる近代的なテクノクラートである。ところが繊維労働者は、いまなお“古い”インドに属しており、彼の社会的情緒的価値は、家族、宗教およびカーストの伝統的価値観と密接に結びついているからである。

たんなるアウトサイダーがインド人を理解し、彼らの感情と思考を知ること、これよりもどれほど困難なことであろうか。ムクンダラオはその論文の中でさらに進んでインド人一般、またソーシャルワーカー、とくには援助者としてこの地域に来るアメリカのソーシャルワーカーに関係する、社会的価値観について詳細に述べている。彼によればインドの社会事業学校は、インド人によって建てられたけれども、インドの生活様式とは非常に違ったアメリカのそれをモデルとしたものである。インドの風習を研究して、それに従って方法と技術を調整するところまでは、全くなされなかった。その結果として、多くのインド人がアメリカをモデルにした、これらの学校を卒業して農村地方に赴任したが、そこでは彼らは失敗者

であった。ウェラー氏が述べたことと同じ経験をしたのである。彼らはクライアントと、また地域社会の人びととコミュニケーションすることができなかったのである。

スウェーデンの社会経済学者グンナー・ミュルダール博士 (Dr. Gunnar Myrdal) もこの見解の支持者である。スカンジナビア・ラジオ放送の最近のインタビューで、博士は、次のような話をして、婦人聴衆 (多分スウェーデンの) に非常なショックを与えたと語っている。

われわれが何をしようとしているか、を説明できないなら、インドの農村から婦人を病院に送り、手術台に乗せ、両脚をひらかせ、バジナにスパイラルを挿入し、人口爆発の問題を処理する“方法”を見出したと考えることはできない。われわれは少なくとも、まずインドの言葉を覚えねばならないのだ、と。

私はこれに加えて、言葉を知ることが必要であるばかりでなく、その地方の人びとの伝統的な道徳的慣習を伝える、これらの言葉に深く定着した情緒的意味をも理解しなくてはならないといっておく。

グンナー・ミュルダール博士は“ショッキングな話をする”ので有名である。博士は必ずしもみんなを喜ばせるわけでない、率直なものいい方をよくした。同じインタビューで、彼の最近の社会分析によれば、民主主義はある国々ではうまく行われても、残念ながら、他の、たとえば、インドのような国では、役に立つ政治的手段ではないかもしれないといったのである。

グンナー・ミュルダール博士の説がある人びとにショックを与えるのは、明らかに博士が自分の信念に、あえて忠実であろうとし、また自分の信念が変るかもしれないことを認める勇氣を持っているからである。このことは、福祉国家に関する彼の考え方に、とくにはっきり現れていた。この福祉国家の概念は、社会福祉を主として法律と経済に立脚する構造のものとする、全く社会経済的な組織構成アプローチに関係するものである。しかし“福祉国家を越えて” (beyond the welfare state) という書物では、福祉国家が、もし違った次元、すなわち、宗教的次元との関係において、人びとのニーズにこたえることができないならば、福祉国家は適応不全であると思うと述べている。経済学者として、これはなんというショッキングな声明であろう。

スカンジナビアに現存するいわゆる福祉国家は、社会福祉問題に対する決定的な解答ではない。国民は法律によって保護され、経済的に保障され、選択の自由を持っている。出版は自由であり、選挙権を持ち、個人の自己決定権は、近親相姦の一般的禁止さえ、法によって撤廃

したほどである。それでもスウェーデンは問題を持っている。スカンジナビアは、かつては見たことのなかったようなたぐいの問題を持っている。スカンジナビア諸国は、その高い生活水準の故に深刻な情緒的問題を持っているのである。いまやグンナー・ミュルダール博士は、最近の出版物の中でわれわれの社会は“病んでいる!”と声明する。このことは注目に値することである。社会構造と組織構成は、どんなに民主的であっても、それだけでは十分ではない。概念としての貧困は除去されたかもしれない。しかしあわれな人びとは、いまもなくなりほしくない。スウェーデンでは合法的な中絶、小学校の時から手に入る産児調節用薬剤、男女平等の賃金、男女平等の教育等々にもかかわらず、精神的に未熟で、不満な女性たちが、いまも社会福祉施設にあふれている。自由教育であり、学校にいるあいだは、ずっと公的手当が与えられるにもかかわらず、若い人びとは不安で落着かない。社会悪ははびこり、個人のニーズはみたされないのである。

ここでスカンジナビアのタイムズ紙 (Times) に掲載された記事の一部を引用しておこう。

スカンジナビアの福祉は荒廃したのだろうか。そうではなく、本来のイメージを維持しようとしているのである。漸進的な改革がなされており、それは福祉国家の弱点が改善されるのを約束している。マーケティングの専門家を雇ったり、データマシンを使ったり、セールスマンを利用することは、たんなるショーではない。それはひびの入った社会保護制度 (social care system) に、新しい目的と意味を注入し、肥大して自由のきかない官僚制に置換えて、真のサービスを提供しようとする、まじめな努力の一部である。……スカンジナビアにおけるこの新しい福祉へのアプローチは、社会的スーパーマーケット (social super markets) とよばれ、市民にこれまでとは全くちがった質のソーシャルサービスを提供するものである。

改革の焦点は、なんらかの理由によって、競争場裡から脱落し、基準のパターンにあわないか、それとも繁栄の中に、貧しくとり残される人びとの上に置かれている。——詳言すれば、地方的レベルにおいて、個別の行動と解決が必要である、個々のケースに焦点が置かれるのである。改革論者の主張によれば、もし社会的保護が豊かな社会において、真に意味あるものとなるべきであるならば、新しい態度、アプローチおよび方法が必要である、いまやこの豊かな社会には、スカンジナビアが1930年代および1940年代に、その

福祉制度を樹立し始めたときは、想像もできなかったような複雑な問題が簇生しているのである。

この新しいアプローチは、おそらく一杯のコーヒーを共にして、クライアントと私的に気持ちよく、静かに話をするることである。そしてソーシャルワーカーは、個人のニーズにこたえるべきである。それではこの“新しい方法”はどこにわれわれを導いていくのであろうか。真直に1940年代と1950年代のアメリカのケースワーカーに一個人対個人の関係に帰るのである。驚くべきことではないか。ショッキングなことではないか。スカンジナビアは、社会経済的概念にのみ基づいた構造と法制的処置方法だけでは、現代の複雑した問題に対応することができず、またレーマンから成る社会委員会の当面する問題にももちろん、こたえることができないことに気がついたのである。彼らは法と論理による社会問題の恒久的解決と社会組織の代りに、人間と力動的過程に帰ったのである。つまりケースワークに戻ったのである。

ノルウェーにおいては、スウェーデンより以上に注目されることが起った。ノルウェーでも、クライアントに対する昔ながらの古い態度は、この国のおそらく世界で最も進んだ、すぐれた社会法制の下でも、予期した結果をもたらさないことが分った。それゆえ政府は、さらにもう一つの法律、すなわち、1964年6月制定の社会保護法 (social care act) を発布することに決定した。この法律はつぎのように規定している。社会福祉局 (the social welfare board) は、人びとが自立するために、あるいは困難な個人的状況を克服し、またはこれに適應するために、必要あるときは、情報、助言、指導を与えなければならない”。言い換ればノルウェーは、法律によって、個人に焦点をあわせる見方を公的サービスに取入れるべきことを定めたのである。そこでは今後、人間を部門別に取扱う官僚的処理があってはならず、法律はつぎのように命ずるのである。すなわち、これらの人びとは社会治療の関係枠の中で、ひとつのケースとして、その特殊なニーズについて解決されねばならないと。

この法律がノルウェーに施行されてからすでに4年を経過した。ところがいま、ソーシャルワーカーは、この法律は訓練された専門家の不足のために、所期の目的を果していないと指摘する。行政官庁である社会福祉局はこのチャレンジに応じることができない。臨床的アプローチは、これまでとは非常に違ったアプローチを要求し、福祉国家の官僚的公務員に必要な教育よりも、さらに高い水準の教育が要請されるようである。これがノルウェー社会事業学校が、こんにち解決しようとしている問題

である。同時にわれわれは心理的治療的アプローチと行政的組織的アプローチとの、両者に対する均衡ある態度が必要であり、また両分野における平等の社会的地位が保証されねばならないことを認識するものである。

英国学校連盟報告書は、グンナー・ミュルダール博士が福祉国家に欠けるものとして、1966年に指摘した要素、すなわち宗教的なものに言及している。同報告は、明らかに、もしソーシャルワーカーの側に愛と、求めることのない行動とが欠けているならば、熟練と技術は十分ではないと述べている。いいかえれば、同報告書もまたパーソナルな関係と、そして天職としてのソーシャルワークに帰るのである。にもかかわらず、もしソーシャルワーカーがその視野を拡大することができず、教育方法をこんにちの実際的必要にこたえるように現実的に調整しないならば、ソーシャルワークはまもなく、死滅した学問になりかねないというデーム・アイリーン・ヤングハズバンドのなげかけたチャレンジは、まさにこの英国の関係枠からであった。われわれはこれらのことすべてに対して、どのように説明できるのだろうか。

さて各国委員会から提出された報告書に戻ってこれを一読してみると、そこにはソーシャルワーク価値について、四つの主な考え方があることが分る。

1. 権威的——司法的見解(フィンランドが代表する)
2. 哲学的——宗教的見解(一部分は英国が代表する)
3. 社会経済的見解(スウェーデンが代表)
4. 社会——科学的見解(アメリカ合衆国が代表する)

13カ国学校連盟の報告書は、これらの見解のすべてを例証している。それらはいずれもこんにちの問題を解決する方法として組立られたもので、あるものは、一面的に一方を強調するか、または他方に重点を置くか、それとも互に重なりあって漠然としたアプローチになっているからである。しかしどの国にあっても不適當である、適切なサービスを与えていないという感じがあり、その点は洋の東西を問わず同じである。一国から次の国へと報告書を読んで行くにつれて、そこには文化的特異体質があり、まずそれを理解し、それにこたえる解決がなければ、真の対応策はおこりようもなく、援助を与えることはできないのである。

ソーシャルワーク教育は、すべてこれらの事実を真剣に取上げねばならないことは明らかである。われわれは互いに、他国のやり方が悪いと批難しあうことを止めなくてはならない。なぜなら、どんな制度も“正しい”とか、“全く適當である”とは考えられないからである。これらの問題は、本質的には“新しく”はないのである。イ

ンドでは過去において、いく百万の人びとが餓死し、科学はすでに過剰人口を憂慮していたのだ。戦争は止む時がなく、残虐であり、奴隷制と他国民による一国民の征服は人間の歴史を通ずる糸である。概念としての社会変動すら新しくはない。それは古代ギリシャ神話において変化の法則として、“普遍法”として多くの議論が重ねられたのである。

このように考えてくると結局、次のように問われるであろう。変化それ自身が普遍法であるならば、普遍的価値のようなものが存在するだろうか。そのことはどんな社会も“偉大なる社会 (the great society)” たり得ず、また長くそうした状態に留まることはできないことを示している。言葉を換えていえば、恒久性は偽りであり、ソーシャルサービスの原動力としての“保障”は、個人のためであろうと、大衆のためであろうと、それゆえ、可能でもなければ、望ましくもないのである。人間は化学的に、生物学的に、また機能的に補足しあうニードを持った男か女なのである。人間は青年であり、また老年であるが、いずれも心理学的、社会学的に多様な可能性を秘めているものであって、それをめぐって社会は、威力と保護的処置により、力と感情の手段を通して築かれねばならない。普遍的な概念は、統一における多様であると思われる。あるいは、あるノルウェー作家がいうように、人生は“たえざる変形”であり、また一哲人がつけ加えたように“永劫回帰”である。

かように考えれば、こんにちわれわれが直面する問題は“新しく”はない。前代と違っている点は、変化の速度と時間の次元にかかわる問題と、世界的なパースペクティブにおける量の問題である。われわれが注意しなくてはならぬことは、種々な国々において、変化の割合が一樣でなく、技術的变化は情緒的变化よりはるかに早いことである。前者は社会的含蓄と大いに関係があり、後者は人間の可能性にかかわりがある。このことから次のように結論することができるであろう。すなわち、社会の変動があまりにも急速であるときは、人間の情緒の変化は、深部の成熟において失速し、社会は“病める社会”となるのである。どんなに豊かな社会であっても、それは人間的に、また宇宙論的に生命の原理との均衡を失った社会なのである。かような時期においては、どんな治療やアプローチも、それが一面的なものであっては、現在ソーシャルワークやその他の学問が受けているチャレンジに対応することは、不可能であろう。

結論において、私はルイ・ロウイ (Louis Lowy) の論文、“社会変動のただ中においてソーシャルワーク教育

は何処へ？”に注意したい。彼は次のようにいっている――。

社会生活の哲学的基础なくしては、知識は適切でなく、熟練はマニピュレーションの技巧と化してしまう。方法とテクノロジーは、認識ならびに情緒の闘争によって到達せられる社会哲学の貢献を必要としている。ソーシャルワーカーは理路整然とした価値観 (たんなるスローガンではない) に基づく世界観 (weltanschauung) を持たねばならない。この世界観は彼らを導いて、この社会と世界において生きるべき人にとって、何が望ましいものであるかをはっきり示すことができるのである。しかもその場合の人というのは、自己自身を実現できる個人であるばかりでなく、自己実現の過程そのものにおいて、他人の自我をも実現させ得る個人なのである。このことが人を人間とするのである。しかしながら窮極の関心は、たんに生き残ることだけでなく、何のために生き残るか？、なのである。そしてこの問との苦しい闘いが哲学学徒の探求の核心にあるのである。

それは真実である。それは哲学の学徒たちが、過去4,000年にわたって探求してきた問題なのである。それは人間価値に対する存在論的アプローチにとっての主要な問である。答はまだ見出されてはいない。

しかしわれわれは、デーム・アイリーン・ヤングハズバンドが1966年に述べたように、“行動科学 (behavioral science) には要領のよい解答はないという発見によって導き出された不確定性 (the uncertainty) とともに生きる”ことを知らねばならない。われわれはまたデーム・アイリーンがつづけて述べたように、“たんに行政官のための忠実な猟犬”に留まってはならないことを学ぶべきである。こうしたやり方では、われわれは“社会変動の促進者として、また衝撃緩和者としてのソーシャルワークの役割を、またそれ以上の社会関係を人間化する基本的役割”を果たすことができないのである。

最後に私はデーム・アイリーン・ヤングハズバンド自身がその生きた証拠であるステートメントを指摘しておきたい。“すべての偉大な教師 (それに私はすべての偉大な人びとを含ませたい) は、共通して、学生の態度に深い感化を与える、非凡なパーソナリティの素質を持っている。彼らは常に、習性的に、偉大なビジョンを持った、きわめて独自の人びとである”。もしわれわれが人格統合のこの深さに達したならば、われわれは、つねに生活の一部である、態度のあらゆる変化に対応することができ、ただ学者的なあるいは科学的な限定によるばかりで

なく、われわれの存在そのものによって、環境に影響を与えるであろう。

第二部

ベルギー・ゲント大学教授
兼ゲント市立高級社会科研究所長
ゲルダ・デ・ボック 著
若林龍夫 訳

フィンランド、ヘルシンキの第14回国際社会福祉教育会議の最終回にあたって、各国代表出席者たちは、ソーシャルワークの小島を去って、海を渡って、社会福祉の本土である、国際社会福祉会議に出席するようにと招きをうけた。このことは、いったい、なにを意味し、なにをあらわしているのだろうか。

専門ソーシャルワークと広義の社会福祉の分野とのあいだには、大きな混乱があり、またそれは、いつも繰返されている事実である。ソーシャルワークそれ自身が、その方法と目的に関して、必ずしも明確であるとはいえないので、一般の混乱は、いよいよ悪化するばかりである。専門ソーシャルワーク、とくにその教育は、活動分野と関連を持たねばならぬことは明らかである。国際社会福祉協議会総裁ユージェン・ブシック氏は、その開会のあいさつのなかで、ソーシャルワーク教育は、将来を望み、変動するニーズにあらかじめ備えるところがなくてはならぬと述べたが、それはいま述べた問題とまったく同じことをいったのである。彼の考えでは、もしソーシャルワーク教育が将来の変動を予想して準備するというのであれば、つぎのような結論になる。すなわちソーシャルワーク教育は、いまより大きな目的に直面し、つまりはソーシャルサービスの最高レベルの（社会福祉官のような）職員を養成すべきである、というのであった。

言葉をかえていってみると、スピーカーの諸氏は、われわれは存在しないか、それとも急速に消失しつつある活動分野——専門ソーシャルワーカーだけが住んでいる“小島”——のために、専門職の訓練をする危険をおかしているといっているようである。このことは直面し、解決するには、きわめて重大な問題であって、これから開かれる国際社会福祉会議および国際ソーシャルワーカー連盟の諸会議において、また国際社会福祉教育会議のメンバーによって、十分に討議がつくされることを望むものである。

専門ソーシャルワーカーの養成に責任を持つ教育者として、私はこの問題について、明白な、また率直な（と

いっても固定したものではないけれども）意見を持っている。しかし私は、こうした意見は、大部分、私自身の国家的背景と経験に根ざしているのではないかという事実、に、するどく気づくようになった。ベルギーでは、他の多くのヨーロッパ諸国の場合のように、専門ソーシャルワークは、かなりの困難を伴いながら、キリスト教的、社会主義的運動によって促進せられたところの、大規模な社会福祉プログラム（ソーシャルアクション）の中から現れた。この専門職は、社会福祉分野に対する特殊の貢献であると思われたものについて、基礎的知識を系統づけることによって、ある程度のステータスを勝ち得た。広汎な社会福祉およびソーシャルアクションのプログラムは、おそろしく一般的で漠然とさえしており、準備は主として、若干の法律、若干の経済行政の大意等々といった、情報獲得の程度であった。訓練は、はなはだ広範囲で各科目はたんにふれるだけで、そのどれも実際に取扱うのではなかった。現在われわれは、専門化しすぎる危険を感じており、いっそう特殊な貢献をするために社会政策の一般的分野に、より大きな戸口を探しているのである。

それはとにかく、ソーシャルワークが他の専門職と対立せず、協力して貢献するのは、社会福祉の本土でなくてはならない。ある国では、この同じ大きな分野に、多くのちがった専門職が共存する可能性がある。すべての専門職が同一の一般的目的に奉仕するのであるが、アプローチの目的と方法がちがうのである。

開発途上の国においては、おそらく社会的分野における、より一般的な訓練が、直接ニーズをカバーするために必要であろう。これらの国々が開発されるにつれて、やがて大まかな専門化が不可避免的に起ってくるが、さしあたり、全目的的社会福祉官 (all-purpose social welfare officers) が実際訓練できるものかどうか、できるとすれば、いかにして訓練するのかということは、当然起ってよい問題である。社会福祉のための政策情報と計画が行われる、高い作業水準においては、最上位のソーシャルワーカーは、経済学者、社会学者、都市計画家および社会行政官のような最上位のスペシャリストとともに、この責任をわち持つ訓練をうけることが必要であろう。国際社会福祉教育会議の分科会の討議全体を通して、多くの注意が払われたのは、ソーシャルワーク専門職に欠けている“作業力”についてであった。それはソーシャルワーク専門職があまりにも孤立しているためであると思われる。とはいえ私は、現状の劣等感を克服しようとして、ソーシャルワーク専門職に、あまりにも大きすぎる

行動分野を要求するのはいけないと思う。

教育会議全体のテーマである「社会的価値とソーシャルワーク教育」のもとに、三つの主なトピックスが取扱われた。すなわち、社会的価値、価値とソーシャルワークおよび価値とソーシャルワーク教育である。

・社会的価値 (social values)

国際社会福祉教育会議が、多くの異なった意味を含んだ概念を取扱うことは、はじめから明らかであった。グンナー・ミュルダールは、“価値”(value)という言葉は、客観性を意味しているのに論理的には根拠がなく、実際には主観的な種々な“評価(値)”(valuation)があるだけであるから、自分は価値という言葉はけっして使わないと率直に述べて彼のすばらしい講演をはじめた。

これと同じ考えは、ザンビアのマイケル・A・ハフ(Michael A. Hough)の価値選択の基準を取扱った、内容豊かなペーパーの中にも現れていた。ハフは其中で選択の標準あるいは基準としての価値を提案した。そればかりでなく、彼はたえず与えられた価値を価値観全体に結びつけたのである。ある分科会の出席者たちは、宣言のかたちで述べられた理想的抽象的な価値には、あまり興味はないと、強く所信を表明したが、生きている価値はもっともっと現実的で、直接に彼らの仕事にかかわりがあると考えたのである。

価値は、一定の文化的背景と密接に結びついているはずであるから、普遍的な社会的評価はないという事実については、大体の同意があるように思われた。パネル・ディスカッションの座長、スタイン博士(Dr. Herman D. Stein)は、多くのことが明らかにされた空間的要素のほかに、時間的要素を軽視してはならない、これもよく評価の相違をもたらすからであるとして加えた。

“より高い” またより一般的な評価の水準にあっては、偉大な普遍性が存在するというミュルダールの見解には、だれも賛成する人はなかった。その上“社会的経済的平等の探求”という見出しのもとに、彼がえらんだ主要な価値には、疑問を持つ人びともあった。個々の人びとのあいだにある相違を考えて、出席者の多くは、この価値を“尊厳あるいは価値における平等”といいなおしてほしいと思った。大体からいえば、ミュルダールがいったような平等は、良き住宅、社会保障、養老年金のような福祉の経済的、物質的側面に、はなはだしく限定されているという感じでもあったのである。

他方、現在の世界状況においては、より強い強調点が、平等の追求よりも、同胞愛、連帯責任および人間的な暖

かさと愛情の追求におかれるべきであると考え人びともあった。ここに始めて、すでにハフによって紹介され、その後の討論にとって意味深いものとなったことがらが現れた。すなわち探し求められるべき、また見出されるべき均衡ということである。ひとつの価値を選んで、その重要性を強調するあまり、他の価値を除外するのは、そうすることによって、他の価値を侵害するから危険であろう。相互に関連した社会的評価は、時間と空間が違えば違うのである。外見上は矛盾しているように思われるが、ちょうど保守と革新の両傾向が、同じ学校に、また同一個人にさえ存在することは、よくあることである。

・価値とソーシャルワーク (values and social work)

出席者が、ソーシャルワークをどう考えるかにかかわりなく、すべての人びとにうけいれられていたことは、ソーシャルワーカーの役割は、こんにちには、以前とはちがった考え方に立っているということであった。ソーシャルワーカーが、ケースワークメソッドを用い、ノンジャッジメンタルな態度をとる時でも、ソーシャルワーカーは、けっしてたんなる鏡ではなく、ニュートラルな人間ではない。彼の注意の焦点がどこにおかれていようとも、彼は人間生活の自然の過程に介入するのであり、この行動に対して全責任をとらねばならないのである。ソーシャルワークが、“価値に根ざしたもの(value-based)”であることに同意するにしても、おそらく、価値あるいは評価に根ざしている(value or valuation-based)ことと、評価に面している(valuation-faced)こととは区別しなければならない。このことをさらに明らかにしてみよう。

一方において、ソーシャルワークは、評価によって浸透された事実を、つねに取扱わなければならない専門的活動である。そして関係する条件によって、非常にちがった価値観の現実に直面するのである。すなわちソーシャルワークが、その中で作業する社会の文化、この社会の副文化、クライアント、ソーシャルワーク機関、個人としてのソーシャルワーカーおよびソーシャルワーク専門職である。これらの条件に関係して多くの葛藤が起るのである。そしてこれらの葛藤のあるものは、実際よりは見せかけのものであって、客観的に取扱うと、結局は、消失するかもしれないが、その他のものは問題解決の活動においてきわめて現実的で、また重要なものである。

他方、ソーシャルワークは価値に根ざしており、かなり多くの注意が、ソーシャルワーク価値に向けられていた。ソーシャルワークは、それ自身の選択基準を持っているであろうか。ソーシャルワークは、特別な評価を持

っているであろうか。ソーシャルワークは一定の価値を支持し、あるいは促進するのであろうか。各国報告書の要約に述べられているように、おそらく、ソーシャルワークの普遍的な（一地方的な）専門文化が評価に関係して、現れつつあるのであろうか。私はこの見解が一般的に承認されたとは考えない。それはとにかく、より限定された作業領域であれ、あるいはより拡大された作業領域であれ、ソーシャルワークは、その専門的行動に基づいて引受ける評価責任については、大いに自覚的であらねばならないのである。

進歩とは何か。われわれは、適切に“社会的に機能する”ということによって、何を理解するのであるか。そしてすべての中でもっともむずかしい、基本的な問を問うことになるが、“社会的健康”とは何か。この問かけを医学の分野で答えることは、ずっとやさしいように思われる。もっともここでも、専門職の知識と手段は、しばしば変化しがちであるから、健康な身体的機能によって何を意味するかについて、明瞭な概念を得ることは、必ずしも容易ではない。精神的健康となると、この企てはいっそう微妙なものとなる。さらに社会的分野となると、定義をすることは真に骨の折れる、むずかしい仕事である。とはいうものの、介入する権利が正当化されねばならないとするなら、それはのがれられない課題であると思う。このことは、分科会に見られた社会改革者として社会変動の意識的エージェントとしてのソーシャルワーカーの役割を強調する明確な傾向に照らしてみると、ますますそうなのであり、さらに変動は、きわめて価値の高い目的と考えられるので、望ましい社会的機能の健全なイメージを創造する必要は、いよいよ差迫ったものとなるのである。

しかし、なお言っておくべきことがある。それは最終総会のスピーカーの一人であった英国のロージャー・ウィルソン (Prof. Roger Wilson, Department of Education and Social Development, University of Bristol) もいわれたことであるが、ソーシャルワーカーに許される“変動”の量は、実際には、彼がその中で作業する社会の構造に、大いに依存している。おおまかにいえば、こういうことになる。開発途上にある社会の、革命的なラディカルな段階にあっては、一方において、高い優先順位が価値変動におかれるが、他方、地域社会によって設けられた目標と評価に関して、それよりはるかに大きな忠誠心が、ソーシャルワーカーに期待されるのである。福祉国家として編成中の、より安定した、落ち着いた社会になると、たとえば、過激な変革期のあとは、維持、促

進、強化の価値が強調されるものである。個人の相違により多くの注意を払う贅沢が許されるというような種類の社会になると、福祉国家があまりにも硬直化した制度となり、ひとがそのために犠牲にされて囚人となることのないよう、進化の継続とありうべき変動とを警戒することが、専門職としてのソーシャルワークの役割となるかどうか、という疑問が起るのである。

この分析は、自己自身の属する社会におけるソーシャルワーカーにかかわるものであるが、分科会ではそれほど同種ではない社会の場合は、ちがった価値観を持つ副文化集団があり葛藤を起すという点で意見の一致をみた。

大体において、評価を変動させるソーシャルワーカーの能力に重点がおかれたが、外国文化の中で作業するソーシャルワーカーの促進した決定あるいは選択が議論になったとき、意見は分かれた。すなわち、彼の介入は、たとえば、国連憲章にうたわれているような、一般的価値を引用することによって、正当化できるものであろうか。もっとはっきりいえば、彼は、個人としての人間の尊厳を、それだけで介入を正当化するような、ソーシャルワークにとっての本質的な価値と考えることができるであろうか。

このアプローチは、一般にうけいれるところとはならなかった。二、三のアフリカの国々の、部族生活のパターンに関して、たとえば、このような個人主義的アプローチは、現存のきわめて価値のある団結心を危殆におとしめ、破壊するかもしれないことが懸念されたのである。このような場合、ソーシャルワーカーは、警告を重んじて、害をすることを避け、自分の評価をまったく捨てるべきであろうか。それともコンサルタントの役割に退いて、将来の援助の可能性を見守るべきであろうか。あるいは、ソーシャルワーカー自身の評価体系を、自己の奉仕する人びとのそれに適応させるべきであろうか。われわれは、地域社会をクライアントと考えて、変動のエージェントとしてのソーシャルワーカー、ならびに望ましい質としての忠誠心におかれた価値をいっそうきびしい検討を当然うけるようにすべきであろうか。

そしてまた、かつてはほとんど独断的解釈ともいうべきものであった、クライアントの自己決定が、こうした変動のエージェントとしての役割に結びついた価値に、適応しなければならなくなった事情に注意することは、多少とも興味のあることであった。自己決定は、いまや、開発される諸能力と合致し、また人間の本質的創造性に照らしてみても、自己実現となるのであった。

変動に参加し、そればかりでなく、これを促進し引起

すことに重点がおかれることに加えて、高い優先順位は、予防にも与えられた。新しく発見せられた概念は、どの概念もそうであるが、この予防の概念も多種多様の意味を持つようになり、あらゆる機会にスローガンとして用いられて、ほとんど無意味なものとなってしまった。ある意味においては、おのおのの行動は、実に、より大きな障害や悪に関して、予防的であると考えることができるが、しかしこれは、ソーシャルワークの目標ないし戦略としての予防が意味するところのものではない。まず第一に強調しなければならないことは、ソーシャルワークは、主として社会的機能不全に関係する場合でも、意識的に治療法よりも予防法を優先させねばならないことである。たといそうすることによって、ソーシャルワークは、自己自身の介入する余地がなくなってもである。このことが重視されるのは、より高い価値は、ソーシャルワーカーが重要な役割をすることによって感ずる満足よりも、常に、有効なプロフェッショナル・サービスにおかれねばならないからである。

とはいうものの、ソーシャルワークは、たんにあるいは主として、“第一次的予防 (primary prevention)” と時によばれるものにのみ、関係すべきであるということとは、まったく別のことである。第一次的予防によって、われわれが意味するところは、教育、立法、政策、立案等々によって、いいあらわされるのと同じの関心と行動である。私見によれば、こういう種類の役割をソーシャルワークに与えることは、専門分野における混乱を引起し、また第一次的予防に、高い情緒的評価を与える結果として、ソーシャルワークは、社会治療サービスよりも、はるかに高尚な仕事のように思われてくる。しかし私は、この社会治療サービスこそが、ソーシャルワークの主要関心事であるべきだと考えるものである。この考えを受け容れる人びとのあいだには、社会政策へのより直接的貢献を支持して、すべての治療的ソーシャルワークは、これを拒否すべきであるとさえ、考えがちな人もある。しかしながらまた、つぎのように考える人もある。すなわち、社会政策の一般的な枠組の中では、二つの側面——予防と治療——が社会的幸福のために必要であり、この両者のあいだに均衡が樹立され維持せられるべきであるというのである。

政府および政府所属の諸官庁や施設機関が社会的責任をとることは、同情と団結の衝動力やその価値を破壊するものではない。たとえば医師は、社会医学のより高尚な仕事や疾病を予防する公共保健計画に、集中的に従事するために、彼らの診察室と診療所を閉鎖せよ、と主張

することは、まったくナンセンスであろう。ここで治療医学と治療機能とは、公共保健計画と予防機能よりも、はるかに高いステータスをかち得ていることを注意することは、意地悪い、おもしろがらせではないだろうか。

しかしながら、第一次的予防へのソーシャルワークの貢献が、直接的であるよりも、いっそう間接的であるとしても、ソーシャルワークは、こんにちよりも、もっと早期の段階で、介入または相談をうけるべきであるという点では、意見の一致が現れた。社会政策の構想、計画および決定の時点で、ソーシャルワークの経験と典型的な見解が考慮せられるべきである。このことは、ソーシャルワークは、常に個人に対するサービスを越えて、反省的方法でも、また予報的方法でも、社会政策をつちかう意識的で慎重な努力をなすべきことを想定するものである。このような見解は、あいにく希望的観測でしかないかもしれないが、その理由は、こうした見解がスペシャリストたちのわかち持つところとならないばかりでなく、このきわめて困難な仕事に対して、普通のソーシャルワーカーの能力が、必要限度を下まわるからである。専門ソーシャルワーク活動を、社会政策目的に関連させるのに必要なのは、個々のケースから概括し、関係を客観化し、貴重なデータを用意するために正確な記録を作り、また予報的な考え方を開発するところの能力と才能である。

こういうタイプのアプローチは、これを臨床家に求めることは無理である。その理由は、一部に気質の問題があり、また一部にこの種の手順の問題があるからである。もし取扱いを誤ると、きわめて貴重な秘密保持の倫理的義務が危うくされるかもしれないのである。にもかかわらず、このようなアプローチは、社会事業学校のカリキュラムに、はげしい衝撃を与えるかもしれないことは、だれにも容易に察せられるところである。ソーシャルワークは、若干の広く一般的に保持せられた価値を専売するものでなく、ちょうどソーシャルワークが、その基礎となっている諸科学から得た概念の特殊な構成をきずきあげようとするように、ソーシャルワーク自身に特有な価値構成に向って前進しなければならない。ソーシャルワーク価値のどんな構成も、それをとりまく周囲の文化と、ソーシャルワーカーが一定の社会のなかで作り出したイメージの明確さによって影響をうける。ソーシャルワーカーのイメージが明確さを欠いていることと、そのイメージがたえず打砕かれていることが、社会事業学校にとって重要問題なのであるから、早熟のそしりをうけないソーシャルワークの真の定義がつよく求められる

のである。

・価値とソーシャルワーク教育 (values and social work education)

ここではソーシャルワーク価値を教えることの可能性と、学生革命運動の意味およびソーシャルワーク教育に対する、この“ハプニング”のはねかえりという二つの主要な問題が取扱われた。

教えることの可能性の討議において、確実に教えることのできる価値と、事例あるいは他の手段によって伝達されねばならない価値とのあいだに、若干の重要な区別がなされた。第一に、ソーシャルワーク価値は、たやすく伝達できるものでないことは、明らかであった。事実、このような価値の教授の可能性を認めることには、かなりの抵抗がみられたし、また教育目的のために、これらの価値を体系的に組織することは、その効果を破壊するかもしれないという懸念があった。それよりもこのような価値をカリキュラム全体に浸透させ、ソーシャルワーク教育体系の中で、教師またはその他の人による事例によって伝達せられることの方が、はるかに望ましいと考えられたのである。私の意見では、若干の体系的な教育は、この特殊な領域においても施すことができる。たとえば、社会事業学校自身が反映し支持するところの、価値構成の批判的討議をすることは可能であろう。また学内で討議される価値と、学生が現場でつきあたる価値とを比較することも可能であろう。一般的にいえば、社会事業学校は、この点については現場に先んじていると考えられた。しかし同時に、学校があまりにも現実から離れているのではないかという心配も表明せられた。大いに強調せられた点は、学校は保護された教育的環境から出て、社会福祉計画の現実の中に入っていく必要についてであった。また教師は“社会的義務を持つ”ものであり、少なくともカリキュラムへの反応に関する限り、学生の意見を聴取せられるべきであることが、強く主張されたのである。

この最後の提言に直接関係のある学生参加の問題は、多くの興味ある問題を引起した。今回の教育会議においては、すべての評価が厳密な審査をうけたのであるから、“権威”の価値もこの運命をのがれることができなかった。したがって教師と、教育体制に責任のある管理者の権威が挑戦されることは、当然の帰結であった。

ソーシャルワークの教師たちは、学生との教育的関係

に伴う特別の責任を確認しながらも、自己決定と民主的参加を支持して、学生運動を比較的容易に是認するか、あるいはそれを促進しさえする傾向がある。これらの価値は、ソーシャルワークの専門的活動においては、常にきわめて重要な意味を持ったものである。したがって、これらの価値は、学生反抗の危機的な場合に、決定に影響することが予期されるのである。会議の参加者たちは、責任ということが、教員と学生の両者によって重んぜられねばならない中心的な概念であると考えた。教員は彼らの専門職の役割に固有な責任に目覚めなければならないし、学生はある一定レベルにおいて協力して実行し、関連ある知識を修得するために、責任をもって準備しなければならない。

この点に関して、ウイルソンはきわめて価値ある論評を加えた。彼はソーシャルワークの教員は、現存の価値の伝達に責任を持つという意味において、保守的であらねばならないがこのことは若い世代が、新しい考えを促進し、新しい価値構成をかたちづくり、あるいはおそらくは、古い価値に“新しいよそおい”を与えることを援助するのに、ラジカルであることを妨げるものではないといったのである。

とにかく、逆説な問題について均衡ある解決を与えようとする不断の努力が、第14回国際社会福祉教育会議のすべての活動の中心に横たわっていたように思われる。事実、こうした探求は、こんにち、世界に起っている、多くのことの底流をなすテーマをあらわしている。価値は互いに対立する関係におかれるべきものではなく、互いに補足しあうものと考えられるべきである。中国哲学の概念を引用すると、つぎのようにいうことができる。すなわち、このような価値と、それと対立する価値とは、はなはだ重大な補足的な関係に立っているので、それらの価値は、その中心に他者の本質を包含しているほどであり、他者のおかげで、やっと存在することができるのである。人間には、深遠にして永続的な、いのちの原理——その本質のなかに、均衡ないし秩序への衝動を含むと同時に、その補足的対立物である、闘争への衝動をつつむダイナミズムがある。西洋文明において、きわめて高く評価された、このダイナミズムは、変化と、進歩と、より豊かな均衡を得るための構造の均衡破壊と、それらの繰返しに——おそらくは現在から永遠に至るまで導くところの活力である。